



UWCの友人たちと(前列左から2人目が筆者)

う淡い期待を抱きつつ、しばらくはおとなしく待ってはみたが、状況は変わらなかつた。やきもきし、ついに意を決して、音量を小さくするようお願いした。すると、拍子抜けするほど爽やかな笑顔ですぐに音量を小さくしてくれた。私が、「察するのは礼儀だ」と思っているのと同じくらい、「何も言わないのは許容している」と彼女は思っていたのだ。この時初めて、自分が、時に無意識に自分の価値観を押し付け、相手を評価していたことを自覚した。「良い」「悪い」の判断の前に、その背景にある相手の価値観を探り、コミュニケーションを図れば理解し合えるかもしれない。たとえ育った環境による表面的な価値観の違いがあっても、人に対する思いやりと

いうような、根っこにある価値観は、意外と共通なのかもしれないと、あらためて考えるようになった。

UWCでは通常の勉強のほかに、ボランティアなどのコミュニケーション、部活動、歴史問題などについてのディスカッション、年三回の大別文化祭、週一回の生徒主催のダンスパーティーなど、さまざまなかたちで生徒同士が交流するようプログラムが工夫されている。いろいろ私が経験したようなパラダイムシフトは、日々の生活のなかで、多分すべての生徒が直面することだと思う。高校生という多感な時期、むき出しの感情をぶつけ合って生活するからこそ学びだったのである。

理解し合えると信じる

社会人になり、リクルートに入社した。国内事業が多い会社には珍しく、海外部署が長く、中国での人材紹介や海外旅行関係の事業の立ち上げに携わってきた。

印象的だったのは中国駐在時の経験だ。私が駐在したのは、事業立ち上げの慌ただしい時期だった。「中国の従業員は会社に対するロイヤリティーが低い」と聞いていたが、やるべきことは山積みでも、会議は時間どおりに始まり、みんな定時に帰ってしまふ。困った末に、UWCを思い出し、重要な会議の冒頭、「日本では、会議の時間に遅れるとい

うのは相手を尊重していないことを意味し、会議の主催者はメンツをつぶされる」と伝えた。すると、翌日から面白いくらいピタッと時間どおりに全員がそろうようになった。

会社に対するロイヤリティーの低さは、組織に対する不信感と家族への高い信頼感の表裏の関係にあるものだということが次第にわかってきた。一概にはいえないが彼らは、一度信頼できる仲間だと認めると、逆に、日本では経験したことがないくらい情熱的に仕事に取り組み、私を助けてくれた。

最終的に中国で成果を残すことができたのは、中国の仲間と相互に理解するよう努め、それぞれが持つ異質な価値観や能力を掛け合わせて、力に結集できたからだと思う。そしてその土台には、UWCで培ったものの見方や姿勢があったからだと確信している。

世界地図を広げると、各国名の上に友人の顔が浮かんでくる。そこには異なる文化に対する好奇心とともに、衝突への恐れがある。しかし、それを乗り越えたときには、きつとわかり合えるに違いないという強く温かい期待感がある。これからの人生をかけて、より大きな場所で、より多くの人と何かをつくり上げていく経験がしたい。その出発点は、やはりUWCなのだろうと、今あらためて感じている。

価値観の違いを乗り越え、力にする

一九九五—一九九七年UWCアメリカン・ウエスト・カレッジ(米国)留学。東京大学法学部、東京大学大学院法学政治学研究科修了後、リクルート入社。HR事業、旅行事業の海外案件の立ち上げ業務に携わっている。

リクルートホールディングス

矢本あや
やもと



UWCに行くまで、海外はとても遠い存在だった。試験に合格した後も、海外で、英語で生活することにリアリティーがなく、不安があったが「人類皆兄弟、何とかなるだろう」と鷹揚に構えていた。

私が入ったカレッジは、ニューメキシコ州のロッキーマウンテン脈中腹にある。テレビのなかで見ると、植物も人も少なく、乾燥した土地で、建物も人も少なく、ウォールマートにバスで行くと、地平線に太陽が沈むのがきれいに見えるのが印象的だった。街はメキシコとネイティブアメリカンの文化が根強く、中心地の建物は映画の西部劇を思い起こさせた。そこで七〇カ国から集まった二〇〇人の生徒

と、寮生活をしながら二年間をともに生活した。

▶ 人類は皆兄弟？

最初に強烈に感じたのは、「人類はそんなに簡単に兄弟にならない」ということだった。高校生は素直で残酷だ。稚拙な英語を話すことで、人間的にも幼稚だと見下されたと感じることもあった。人種差別も初めて経験した。実は単なる本人の劣等感の表れや、ストレス発散でしかない感情も、「人種」というレッテルを貼ることで、受ける側に重いやるせない感情を引き起こすということを知った。日常生活でも戸惑うシーンはたくさんあった。

●ユニテッド・ワールド・カレッジ(UWC)日本協会
UWCは、世界各国から選抜された高校生を受け入れ、教育を通じてグローバル人材を養成する国際的な民間教育機関(本部 ロンドン)。UWC日本協会は、UWC活動を日本で普及させるため、経団連の全面的支援のもとに設立され、UWCに派遣する高校生の選考や奨学金の支給等を行っている。奨学金は、UWCの趣旨に賛同する経団連主要会員企業等からの寄附金を原資としており、企業の社会貢献活動として、UWC日本協会へのご入会を検討いただきたくお願い申しあげる。

欧米では好意的に受け取られる積極的な意見の発信も、日本人の感覚からすると自慢のように感じることもあったし、学校でどんなに深刻な問題が発生しても、いつもと同じように明るくダンスパーティーをするグループには、腹立たしさを感ずることさえあった。

▶ 価値観の押し付けを自覚する

そんな私にパラダイムシフトを起こさせたのは、日常の些細な出来事だった。UWCでは、自分とは別の大陸の学生をルームメイトに持つ。私のルームメイトは米国とドイツの出身だった。その日、私は体調がすぐれず、早めに部屋に帰って寝ていた。後から帰ってきたルームメイトは、それに気づかなかったのか、大きな音量で音楽をかけ始めた。私は、こちらの様子を見て察してくれるだろうとい